だれでも行ける
魅惑の船旅！
～海峡を越える編～

取材・文／小林 希
旅作家、（一社）日本旅客船協会　船旅アンバサダー

運航中の「はやぶさⅡ」。

北海道と本州を結ぶ生命線、より安心安全の船旅を目指して

“北国の船旅”というと、ただならぬ旅情を感じますが、本州最北の青森から船で北海道へ渡るのはひときわロマンを感じます。江戸時代に活躍した北前船（きたまえぶね）も、はるか遠くは北海道（蝦夷地（えぞち））まで人や物を運びました。幾多の船が青森と北海道の狭間に広がる津軽海峡を越え、日本を繋いできたのです。

今夏、青森港から函館港まで、青函フェリーの新造船「はやぶさⅡ」（2999トン）に乗って、津軽海峡を越える船旅をしました。津軽海峡は、太平洋と日本海を結ぶ国際海峡であるため、国内外の船舶が往来する海域。古来、海運の大動脈である要衝の一つです。

青森港と函館港を1日16便で結ぶ青函フェリーは、栗林商船を親会社として、令和4年に共栄運輸と北日本海運が合併して設立された新会社です。共栄運輸は大正12（1923）年に創業し、主に物流事業に従事してきた海運会社で、昭和19（1944）に設立した北日本海運は、平成12（2000）年の海上運送法の改正以降、主に一般旅客定期航路事業に従事してきました。現在、青函フェリーが保有する4隻の船舶は、いずれも栗林商船の屋号「丸七」を継承したファンネルマーク（船の煙突部分に描かれる船社のマーク）が見られます。

今年4月に就航した「はやぶさⅡ」は、先代の「あさかぜ5号」よりも大型化し、定員は約3倍の300人へと拡大。船首の形を球状にして波の抵抗を減らし、船底もV字型にすることで揺れを抑えるなど構造を見直したそうです。また、燃料効率の向上を図り、従来よりも省エネな船に。

船内は、ぬくもり感のあるベージュや落ち着いた雰囲気のライトブラウン、明るい白を基調色として、北国らしい爽やかさと上品な印象を受けます。船内デザインには、函館にゆかりのある“五稜郭”、赤い実を付ける“おんこの木”、道南に多く生息する野鳥の“ヤマガラ”をモチーフに使用しています。来年就航予定の新造船「はやぶさⅢ」には、青森にゆかりのある“刺し子”や“りんごの木”、“ふくろう”などをモチーフに考えているそうです。青函フェリーによると、「地元の人たちに、“我が街の船”と愛される船になってほしいという思いが込められています」。

船内の客室は、ベッドが置かれたステートルームやゆったりと座れる2等椅子席、カーペットの2等席、バリアフリー椅子席、女性専用の2等座席とバリエーションが増え、客層やニーズに応じて利用できるようになりました。船長は、「北海道と本州をつなぐ本船は、地元の人たちにとっての生命線。新造船になって、よりバリアフリー設備が拡充したことで、お年寄りや子供、体が不自由な人も安心して安全な船旅をしてほしい」と言います。

黒と白の配色でスタイリッシュなブリッジで、出港の準備に入る中野船長。

船内は、エレベーターやバリアフリートイレはもちろん、船内の通路には点字付きの手すりを設置。車椅子スペースと優先席エリアが一緒になった「バリアフリー客室」は、その広さと席数の多さから「どんな人にも安心安全の船旅を」という同社の思いが具現化した姿だと感じました。女性専用の客席には、鏡付きの着替え室があり、靴箱には北国ならではのブーツがおける靴箱が備わり、女性目線の配慮がしっかりと行き届いています。

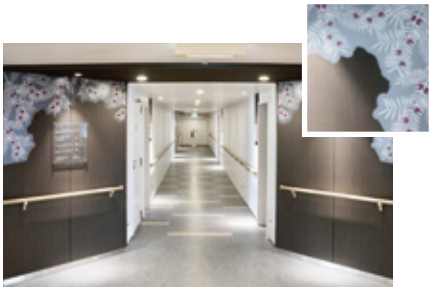
力強い太陽に送り出されて青森港を出港し、津軽半島と下北半島に抱かれた陸奥湾を抜け出ると、ゆらりゆらりと船が揺れ始めて津軽海峡へ。デッキに出ると、驚くほど海面が近くに見えます。運が良ければ、イルカやクジラが見られることもあるそうです。

約4時間の移動中にすっかり日が沈み、函館の夜景が海上に見えて来ました。函館港は安政6（1859）年に国内最初の貿易港として開港された港の一つ。街並みの美しさと、ようやく辿り着いたという安堵感に胸打たれ、これまで津軽海峡を渡る多くの乗員乗客も同じような思いを抱いて船旅をしてきたのだろうかと感慨深くなりました。

昭和63（1988）年に青函トンネルが開通し、津軽海峡を渡る多くの船舶が姿を消したようですが、青函フェリーをはじめとする青函間の船旅は、後世にわたり存続してほしい日本の宝だと思います。“だれにも優しい船”になった新造船がその先駆けとなってくれると信じています。

新造船「はやぶさII」

「はやぶさII」は函館市や道南にゆかりのあるモチーフがデザインされており、中央ロビーのふきぬけは開放感がある。トイレは黒と赤の配色で一見して所在が分かりやすくなっている。



一階のロビーには、「おんこの木」がデザインされた通路入り口があり、その奥はステートルーム、女性専用の2等座席、トイレ、シャワーなどがある。船内全体がホテルのような雰囲気。

「バリアフリー椅子席」が設けられたバリアフリー客室は、入って左手のソファ席は全て優先席で、奥には車椅子を固定できるスペースがある。

乗船口（車両甲板）とバリアフリー客室があるフロアを移動するエレベーター。「はやぶさII」の乗船口は、車と同じ入り口になっています。エレベーターの利用や介助が必要な方は、青函フェリーへの事前予約が必須です。出航１時間前までに、手続きが必要となります。

高齢者の乗客が多く、揺れることの多い津軽海峡では、特段必要な配慮として船内の至るところに手すりが設置されている。また、手すりの端部には視覚障害者のための点字が付いている。さらに、バリアフリートイレや運航モニターも設置されている。

エコモ財団マーク

エコモ財団では、日本財団からの支援を受けて、海上交通におけるバリアフリー化を推進するため、旅客船並びに旅客船ターミナルのバリアフリー施設・設備の整備に対して助成を行っています。
今回、取材した「はやぶさII」のバリアフリー設備は、この助成制度を活用して整備されています。